

聖書：Iサムエル26：1～25

説教題：主は私のいのちをたいせつにして

日時：2017年6月25日（夕拝）

今日の26章は二つ前の24章と大変良く似ています。24章でサウルはダビデを捕らえようとして荒野へ追跡に出かけました。その途中で彼は用を足したくなり、一人ほら穴へ入ったところ、何とその奥にダビデたちが隠れて潜んでいました。サウルはただ一人でしたから、しかも無防備の状態でしたから、彼に手を下そうと思えばダビデにはそれができました。しかしダビデは部下たちを説き伏せ、それをしませんでした。ただこっそり上着の裾だけを切り取りました。ほら穴から出て行った後でサウルはこのことを知り、ダビデに「悪かったのは私だ」と告白します。そしてあなたは必ずイスラエルの王になる！と言いました。それをそっくり再現したようなことがこの26章に記されています。

そのため、ある人は一つの出来事が2つの伝承となって、このように書き留められたのではないかと見ます。しかし聖書の中にこういうことはよく見られることです。アブラハムも妻サラを妹だと偽った話が創世記に2回出て来ます。イエス様による5000人の給食の記事の他に4000人の給食という、これまた似通った記録があります。イエス様の宮きよめの記事も公生涯の最初の方と最後の方の両方に出て来ます。従ってこのようなことは特別なことではありません。かえって似たような記事が繰り返し出て来ることによって浮かび上がるメッセージがあるものです。

さて26章。サウルのところにジフ人がやって来て、「ダビデはあそこに隠れているではありませんが！」と密告します。この知らせを受けてサウルはどうしたでしょうか。2節を見ると、また3000人のイスラエルの精鋭を率いて荒野へ下って行ったとあります。ここにサウルの霊的状态が示されています。前回あれほどの経験をしたのですから、少しは異なる反応をしても良さそうなものです。しかしジフ人の言葉を聞いて、また同じ行動へと走った。ここに彼の状態が一層の悪化をたどっていることが示されています。学んだことが生かせない。そこから抜け出せない。止まることができたはずなのに、そうできず、悪を行なうことに突進するサウルです。

一方のダビデはどうしたでしょうか。彼はサウルが再び自分を追って荒野に来たこと

を知ります。そして自ら出て行ってサウルとアブネルが寝ている場所を見つけたと5節に記されています。そして6節を見ると「だれか私といっしょに陣営のサウルのところへ下って行く者はいないか」と言って、アビシャイと一緒にサウルの陣地に乗り込んで行きます。これを読んで私たちはかつてのギデオンを思い起こします（士師記7章）。すると眠っている兵士たちの間をスルスルッと通り抜けて、何とサウルの枕元までたどり着いてしまった。そこにはサウルの槍が地面に突き刺してありました。まさにおあつらえ向きです。アビシャイは言います。「一気にサウルを地に突き刺すチャンスです。二度することはありません。」

しかしダビデはアビシャイに、そうしてはならないと言います。9節：「しかしダビデはアビシャイに言った。『殺してはならない。主に油そそがれた方に手を下して、だれが無罪でおられよう。』」24章と同じようなダビデの言葉です。しかしここにいくらかの違いを認めることもできるでしょう。24章でダビデは最初はサウルに手を下すつもりで近づいて行ったようです。そしてその途中で、そうすべきでないと思いとどまった。しかしこの26章ではそのような迷いや揺らぎはありません。彼の態度は断固たるものです。10節：「ダビデは言った。『主は生きておられる。主は、必ず彼を打たれる。彼はその生涯の終わりに死ぬか、戦いに下ったときに滅ぼされるかだ。』」

この言葉は明らかに前の25章の経験を反映しています。ダビデはここで「主は必ず彼を打たれる」と言いましたが、この「打つ」という言葉は25章38節で「主がナバルを打たれた」という時に使われていた言葉です。25章でダビデは、善に代えて悪を返したナバルに復讐しようとしてしました。一家皆殺しにしようとしてしました。しかしアビガイルによって、自分の手で復讐をしてはならないと諭され、思いとどまりました。その結果はどうだったでしょう。それが25章38節の「主がナバルを打たれた」ということでした。ダビデはこのことからしっかり学んでいたのです。サウルは似たような状況が起こる中で一層霊的悪化の状態をたどっていましたが、ダビデは対照的に前進・成長の道を進んだのです。

ダビデは10節で「主は生きておられる」と告白し、サウルへの報いを委ねています。その場合、それがいつなされるか、またどんな方法でなされるか、も委ねなければなりません。それはナバルのようにすぐかもしれない。あるいはダビデがここで言うようにサウルの生涯の終わりの時かもしれない。あるいは戦争に出陣している時か

もしれません。ダビデはそのことを主の摂理の御手に委ねます。そして自分としては、主に油注がれた方に手を下さず、敬う道を進みます。そしてその証になるものとして槍と水差しを持って帰ったのです。

立ち去る様子が記されている 12 節には特別な主の守りがあったことが記されています。二人が立ち去る間、だれひとりとしてこれを見た者も、気づいた者も、目を覚ました者もいませんでした。それは主が彼らを深い眠りに陥れられたからとあります。主に従う者にはこのような奇しい主の支えがあるということです。ダビデとアビシャイは、このような主の導きがあったとはこの時は知らなかったでしょう。同じように私たちの生活にも、私たちが気づいていない多くの主の守りがあるのでしょう。

さてこの章後半、13 節以降でダビデは向こう側へ渡って行き、山の頂上から將軍アブネルに呼びかけます。ダビデはアブネルと話したいわけではなく、サウルにメッセージを送りたいと思っています。ダビデが送りたい基本的メッセージは「あなたのしていることは不当です」ということです。18 節：「なぜ、わが君はこのしもべのあとを追われるのですか。私が何をしたというのですか。私の手に、どんな悪があるというのですか。」私たちは 24 章以降、個人的復讐をすべきでないことについて見ています。しかしこのことは相手の悪に対して何も言わないということではありません。悪を悪と言うことは正しいことです。不正なことは不正ですと語ることは大事なことです。しかし注目すべきはダビデは復讐心からこれをしてはいないということ。手や足を使って復讐しなくても、言葉を使って復讐することもできます。ダビデはそういうことはしていません。彼はあくまで謙遜にアピールしています。19 節を見ると、その表現の仕方においても気を使っていることが分かります。ダビデはそこで、あなたをこのような行動に仕向けているのは誰かと問い、それが主によるならば云々、人によるならば云々と語っています。ダビデはサウル自身に問題があることを前提にしないような言い方をしながら、サウルに自らの悪を悟らせる言い方をしています。20 節もそうです。ダビデはサウルの方が自分より強い人間であり、はるかに重要な人物であるかのような言い方をしています。こうする中でサウルの告白を引き出しています。21 節：「サウルは言った。『私は罪を犯した。わが子ダビデ。帰って来なさい。私はもう、おまえに害を加えない。きょう、私のいのちがおまえによって助けられたからだ。ほんとうに私は愚かなことをして、たいへんなまちがいをした。』」

ダビデは 22 節で「さあ、ここに王の槍があります。これを取りに、若者のひとりをおよこしてください。」と語った後、23 節でこのように自分の信仰を告白します。「主は、おのおの、その人の正しさと真実に報いてくださいます。主はきょう、あなたを私の手に渡されましたが、私は、主に油そそがれた方に、この手を下したくはありませんでした。」ダビデはサウルに手を下すこともできましたが、主に信頼してそうしませんでした。そして注目すべきは 24 節：「きょう、わたしがあなたのいのちをたいせつにしたように、主は私のいのちをたいせつにして、すべての苦しみから私を救い出してください。」これは人間の良い行ないが神の救いを勝ち取るという意味ではありません。ダビデがサウルに手を下さず、彼のいのちを大切にしたのは、主の守りを感謝し、主に信頼したからです。そういう意味では神の恵みが先です。しかし神に感謝して、敵のいのちをも大切にするという神の御心に従う歩みへ進んだ時、ダビデは主がそのように私のいのちを大切にし、守ってくださるとの喜ばしき確信に生きることができたのです。これと似ているのは「主の祈り」の中の罪の赦しに関する祈りでしょう。私たちは神に赦された者として他人を赦すのです。しかしそのようにして他人の罪を赦す時、私たちは自分が神から赦されていることを深く味わい、またこれからの赦しについても確信を持てるのです。反対から言えば、人を赦さなければ私たちは神の赦しを確信できないのです。

同じようにもしダビデがサウルに手を下したら、逃亡生活に終止符を打つことができ、ある意味で望ましい状況が実現します。しかしその後、ダビデは神の守りを確信して生きることができなくなります。神の命令にそむいて、その状況を勝ち取ったからです。しかし神に信頼して正しく歩み、サウルを敬って手を下さない道を選び取った時、彼は主が私を大切にし、これからも私のいのちを守ってくださると確信することができた。最後の 25 節で再びサウルからの言葉を受けます。サウルは言葉は気まぐれで当てにならないというのはその通りですが、敵の口から再びこうして祝福の言葉をダビデは聞いたのです。そしてこれがダビデとサウルが交わした最後の言葉となったのです。

私たちはこうしてダビデがいよいよ主に信頼する正しい道を進んだことを見ます。サウルに追われる中でも手を下さない。復讐するチャンスがあってもそうしない。ダビデはこれからイスラエルの王となる人です。その彼がもし自分でサウルに手を下したら、たとえ王になっても、罪に手を染めて王位を勝ち取った人になります。確かにひどい悪をされたが、それに対抗して自分自身も悪を行ない、人間の力で王位を勝ち取った人に

なります。そのような王では神に祝福されません。神に祝福される王は神に信頼し、神にこそ従う道に歩まなければなりません。ダビデはこうしてサウルから繰り返し悪を受けながら、いよいよ正しいあり方を学び、仕返しせず、神の御心に従う歩みへ進んで行きます。こうして祝福される王となって行きます。これを見る時に思うのは、彼の姿はやがてのまことの王を映し出すものとなっているということでしょう。ダビデは色々な失敗をしましたが、私たちのまことの王なる主はまさにこの道を完全に進まれました。人々からの様々な仕打ちや侮辱、迫害を耐え忍ばれました。I ペテロ 2 章 22～23 節：「キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見出されませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」 主はあらゆる苦難の中でも罪を犯さず、神を信頼して正しい歩みへと進み、そうして神に祝福され、また私たちに真の祝福をもたらすまことの王となられました。このような王を神が備えてくださったこと、またキリストがその道を戦い抜いてくださったことを感謝したいと思います。ダビデはこのまことの王を映し出す歩みを神の恵みによってこうしてささげることができました。

そして私たちはまことの王を見上げつつ、自らもここに生きるべきです。24～26 章にかけて学んだことは、自分の手で復讐してはならないということ。個人的に仕返しをしてはならないということ。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする。」と神は言っておられます。そのことを信じて、私たちは神が私たちに命じている道に歩みたいと思います。神を信頼して復讐せず、正しい道に歩み続けたいと思います。その時に私たちもダビデと同じ確信に生きることができるのです。「主はわたしのいのちをたいてつにして、すべての苦しみから私を救い出してくださいませ。」